

第二十一番目の if = 処女作への歩み

あらかじめ断っておくべきであったが、ここに if を観点とせる「ミニ自伝抄」は、その記述が必ずしも歴年順とは言い難いことである。何となれば、一連の継起した事柄は、時として可成りの長期間に起ったことも、一ヶ処にまとめて記録したこともあるからである。

その最も顕著なる一例は、私が京都大学卒業後、大阪の天王寺師範及び女子師範の専攻科の、しかも哲学及び倫理学を一人で担当するというが如き、稀有の幸運に恵まれたのは……普通なれば四人係りで分担すべきであったろう……実はそのかみ、広島高師を卒業の際「大阪以外ならば何処でも可」というが如き、非常識極まることを提出したが、皮肉にもその大阪に赴任せしめられたこと、及びそれと関連して、上述の如き恩恵に浴するに至ったことについては、凡てを一括して述べたこと故、ここには再説せずして、むしろそれ以後の歩みに付いて書くことにする。

さて、当時の私は、一日に大たい七時間以上は読書に専注し得たのであった。即ち学校にて授業の間空き時間三時間の外、授業後二時間は必ず学校にて読書し、その後自宅に帰った後も二、三時間は読んだので、前後を通算すれば、大凡一日平均七時間前後は読書に専注し得たるわけである。かくしてこの様な生活が七年ほど続いたため、やがて「処女作を……」ということになったのである。

然るに処女作についてはかねてより、いやしくも純正哲学専攻者たらんとする以上、何か一つ根本的な問題を捉えて、それを徹底的に論及すべきものとは考えていたが、現実の私の生活としては、専攻科における哲学の教師として、概括的一般的な諸問題を避け得なかつたのであった。かくして一応出来上がったものが、後に「哲学叙説」と名づけて刊行したものであって、体裁はふっうの哲学概論書に似ているが、その間多少は自らの考えを入れたつもりだが、大したものではなかった。

唯念のために付記すれば、私は彼の書を女子師範の専攻科で、口授して筆記させたことである。それゆえそれらは、自らは一片の手控えもなく、全く空に口授させたのである。又それらの問題を考えるためには、女子師範への通勤の途上、心に浮かんだことどもは、それとなくノートに手控え、そのため手カバンを道路脇のちり箱の蓋の上に置いた思い出は、今考えても懐かしい極みである。

そしで今振り返って、三十七、八才というあの頃、もし私が思い切って彼の書を書かなかつたならば、次に述べようとする「恩の形而上学」は、勿論出来ようはずはなく、彼此考え合せれば、あの際未熟ではあったが、彼の処女作を書いたのは、今にして考えればやはり「神天」の導きと言ってよいだろう。